

行政視察報告書

令和元年10月18日

会派名 無所属クラブ
会派代表者 堀 元
(参加者：堀 元・大藪 豊数)

行政視察の結果について、次のとおり報告します。

①

年月日	令和元年10月3日(木)
視察時間	13:00~15:00
視察先	静岡県三島市
視察項目	FMラジオを活用した市の取り組みについて

②

年月日	令和元年10月4日(金)
視察時間	9:45~11:30
視察先	さいたま市桜環境センター
視察項目	さいたま市桜環境センターについて

行政視察報告書

①

年月日	令和元年10月3日(木)
視察時間	13:00~15:00
視察先	静岡県三島市
視察項目	FMラジオを活用した市の取り組みについて
■目的 当市における災害対策・にぎわい創出などのため、コミュニティFMラジオ局の利活用状況・先進事例などを視察・研究する。	
■内容 【過去の経緯】 昭和28年から続く同報系災害無線(現在の江南市と同じ)について多くの苦情が市民から寄せられた。それらのほとんどが「聞こえない」または「聞こえにくい」であった。 平成8年『災害対策』を主目的として(株)みしまかなみ(ボイス・キュー)設立。三島市と隣接する函南町が広域行政組合などの動きが活発であり、生活圏が似通っていたため、両市町で合同出資をして会社を設立する。資本金4000万円(三島市3000万円・函南町1000万円)、発行株数2,440株(うち三島市の所有株数は600株、全株数の24.59%で筆頭株主)である。 平成9年6月1日に開局と同日付で『非常災害放送に関する協定書』を結ぶ。 【事業内容】 平時から市民に親しまれる番組作りなど、非常時の「いざ」に備えた。三島市の番組も制作を委託した。委託料は令和元年度で14,533千円である。市職員が局アナと対談形式で市からのお知らせを放送したり、市長出演の番組を録音し、5分番組として週に2~3回放送したりする。 『広報みしま』を基に、局のアナウンサーが3分番組を編集録音し週10回放送している。 最も大切なのが、災害時における緊急放送であり、三島市と函南町からの緊急放送がある場合、他の放送番組に優先して緊急放送を流せる仕組みが作られている。	

【放送局の所在地など】

三島市役所から徒歩1分程度、別館の3階建て三島市総合防災センタービルに放送局を設置している。

1階は災害対策本部が設置されるスペースを確保、2階は危機管理室、3階にみしま・かなみ放送の放送局機能があり、緊急時に効果的に市民に各種の情報が伝えられる。

また、同報系無線によって流される緊急放送とラジオ放送が同期されている。



(三島市役所ホームページより)

【防災ラジオの販売】

コミュニティFMラジオ放送の受信が好調なため、平成18年から同報系無線などを自動受信して自動的にスイッチが入りスピーカーから流れる『防災ラジオ』を導入、1世帯1台に限り1,000円で市の窓口(危機管理課)が販売している。実際の防災ラジオは数千円するが、多くを防災対策の助成金などを当てている。現在18,552台が販売され、三島市の総戸数の4割がこのラジオを設置している。大変に優れたものである。



(三島市役所ホームページより)

【アンケート】

平成26年の街頭聴取率調査結果

ボイス・キューを聞いたことがあるか？

毎日または時々が6割を超えている。

ラジオではどの放送局を聞いているか？

ボイス・キューがトップとなっていた。



VOICE CUE

FM 77.7MHz

<http://www.777fm.com>

(ボイスキューホームページより)

【問題点と今後の課題】

聴取率調査において、「ボイス・キューを聞く場所は？」の回答の回答に『車の中』と答えた方が非常に多く、車が使えなくなる大規模災害時にはどうなるのか、課題を残している。

緊急時に備えるために、平時に一人でも多くの皆様にボイス・キューを聞いていただくために、さらに魅力ある番組作り、ラジオ番組に限らずボイス・キューが主催するイベント開催などに力を入れていきたい。

【三島市における他の情報発信の手段】

コミュニケーションアプリ『LINE』を活用した情報発信で平時にはイベントや行政サービスの案内を配信。台風や地震などの災害発生時には、従来の市民メールと合わせて、『LINE』を活用した情報発信をしている。

好評であるが、発信する本数に関して多ければ「多い」と苦情が来て、少なければ「少ない」と苦情が来る。

AI(人工知能)を活用した総合案内サービスを導入している。これはスマホやPCを使いチャット(対話)方式で利用者の質問に回答。『子育て』や『ゴミの出し方』、『住民票の申請方法』などキーワードを入力すると、AIが瞬時にして解析して回答を案内する。

しかし、これらも過日の台風による長期停電時には使えなくなる可能性が高い。

【最終手段として】

現時点で三島市が激甚災害に見舞われたり、大規模災害に遭ったりした経験はない。しかしながら、これらの災害はいつ何時起きるかは全く分からず、いざという時の対策は未知のものである。

しかしながら、結果的に電気などのライフラインが止まってしまったとき、市や市民団体、地域の商業施設などと市民をつなぐ情報伝達手段は、家庭用のエンジン式発電機で作られた電力でも確実に大切な知らせが送信できるコミュニティエフエムラジオ放送局と、家庭にあるラジオや車のラジオで安易に聞くことができるボイス・キューになってしまうであろう。

■所感

静岡県は一般的に防災意識が強い県民性があると聞き及んでいる。

太平洋に面するほとんどの市町村にはコミュニティエフエムラジオ放送局があり、県域放送であるNHK静岡やSBS静岡放送では放送ができない、とても身近な情報が確実に市民に流れてくる。

例えば、「〇〇公園で飲料水の配給が始まった」とか「〇〇市の山田太郎さん78歳が〇〇駅で見かけられた後、行方不明です。服装は・・・」などの情報である。これらの情報は市の広報誌はもちろん新聞や電子メール、SNSでさえ追いつけない速さで市民の耳に届けられ、迅速性を問われる情報を何よりも早く市民に伝えられる。

現在、江南市では三島市が問題視した同報系防災無線による大型スピーカーからの緊急情報に頼るしかなく、大雨で窓を閉め切った家庭内やスピーカーから離れた場所などに住む市民に確実に緊急情報が伝わるとは限らない。それを補完するために市独自のラジオ放送局を持つことは江南市の質的向上につながることも間違いはない。

さらに、オワコンといわれるラジオが地域で多くのイベントを開催しながら街づくりや賑わい創出に寄与している。

まさに江南市にあればいろいろな意味でメリットが大きいと考える。

行政視察報告書

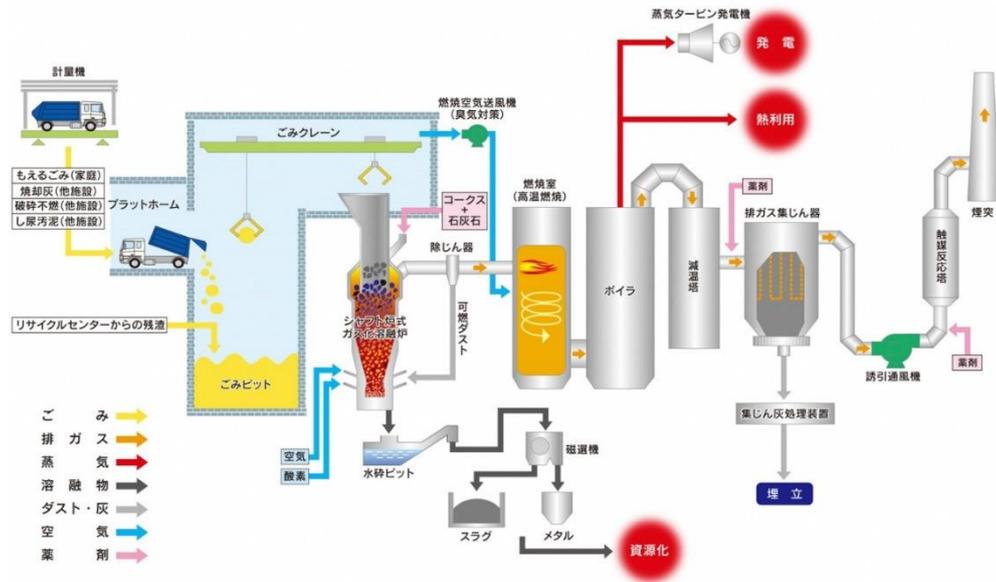
②

年月日	令和元年10月4日（金）
視察時間	9:45～11:30
視察先	さいたま市桜環境センター
視察項目	さいたま市桜環境センターについて
<p>■目的</p> <p>当市において将来建設予定のごみ処理施設について、少しでも市民のためとなる施設建設ができるように視察する。単に迷惑施設としないための方策なども学習する。</p>	
<p>■内容</p> <p>【沿革】</p> <p>東京など首都圏への通勤圏内として目ざましく発展し、急激に人口を増やしたさいたま市は、その人口の増加とともに大量生産、大量消費、大量廃棄型の限りある地球資源の枯渇や、ごみの最終処分のひっ迫などさまざまな環境問題を引き起こしていった。だからこそごみ処理に関しても施設の充実をはからねばならない状況に迫られ、これまでの生活の見直し、環境負荷の少ない『循環型社会』を形成していかなければならなくなった。</p> <p>この桜環境センターは、熱回収施設、リサイクルセンター、管理棟（環境啓発施設・余熱体験施設）で構成され、市内から排出されるごみを適正に処理するだけでなく、循環型社会を構築していくためにさまざまな取り組みを行っていた。</p>	
	
<p>（桜環境センターホームページより）</p>	

【事業内容】

旧埋め立て処分場と旧し尿処理施設があった場所に、平成27年4月に施設が建設され、稼働を始めた。

- ① 熱回収施設には、シャフト炉式ガス化溶融炉が採用され、高温で燃やされたごみから発せられる熱をボイラで熱エネルギーとして回収して蒸気を作り、発電や温水として活用する。最終的には、燃えなかった金属類とスラグだけが出てくる。金属類のほとんどが鉄で、建設機械などに利用され、スラグはインターロッキングブロックや道路舗装用材として利用される。



(桜環境センターホームページより)

- ② リサイクルセンターで回収されたごみのほとんどは資源化されており、資源化されなかったわずかなごみは燃えるごみピットに送られる。家具などの大型ごみや自転車、家電製品などは頑強な破砕機を二度通して粉砕される。スチール缶とアルミ缶は磁性体を使い分別される。その他ガラス瓶や電池などは手作業で分別される。



(桜環境センターホームページより)

③ 管理棟には循環型社会を学べる啓発施設(無料)、余熱体験施設としてウォーキングプールや露天風呂、レストランなどがある。



(桜環境センターホームページより)

【所見】

民間に維持管理運営を委託しているこの施設は、いかに『ゴミを処理している迷惑施設』であるというイメージを払拭しているかが細部にわたって見受けられた。扉一枚、壁ひとつで別の世界を見ているような錯覚さえ覚える。最終処分される資源ごみの分別は手作業によるものとの説明を受けたが、ゴミの種類も多岐にわたる中、さらなる安全性を確保する努力を重ねておいでだというお話だった。

■所感

驚いたことは、視察のためにこの施設に到着したのだが、視野の中にごみ収集車がなければ、にぎわっているスーパー銭湯とスポーツジムの複合施設である。まず、ごみの匂いなど異臭がない。併せて施設内管理棟の余熱体験施設では多くの市民が体を鍛え、食事をし、麻雀に興じ、カラオケを熱唱し、大浴場につかって楽しんでおいでだ。料金も値打ちだが、ある意味利益を出しているという点に注目した。江南市にとって市民の側からすればやはり『迷惑施設』と映るごみ処理施設、いかに近隣住民に受け入れられる施設を作るかがこの視察で問われたところである。笑顔と笑い声が聞こえてくる、そんなごみ処理施設を作らねばならない。

※掲載しているイラスト等はすべて許可をいただいています。